

---

# 例えばこんな毎日を

キャビア伯爵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

例えばこんな毎日を

### 【Zコード】

Z9416Z

### 【作者名】

キャビア伯爵

### 【あらすじ】

ちょっととした毎日をただただ思うように、日記のようで小説のような、そんな4人の少しへンテ「な毎日のお話。超能力とかもあるかもねつ

この小説は亀更新や  
更新不定期となる可能性が非常に高いです。一応身内からのリクエストを叶えた作品です。作者の文才はちょっと低め。色々と稚拙なところがあるかもしだいけどそんな所も許して上げますという人のみお通りください

001 姉弟の卒業（前書き）

はじまつちました。心が寛大な方のみお進みくださいねー

## 001 姉弟の卒業

日常。

一言で言えばそりだらうつか。

このお話は、あつと変わつてこへ日常で。

このお話は、あつと・・・。

西暦2050。人々の間に、『特殊進化症候群』といつ病氣が流行した。

この病気は一瞬の強烈な頭痛の後、意識を失い昏睡するといつものだ。

・・・しかし、この病気の症状はこれだけではない。

この昏睡から目覚めた者は何かしらの「力」に目覚めていた。

『P.S.I』 そう、超能力である。

そして、空想の産物だった超能力が生まれ、日常となつた時代。

「ただいまー」

「お、帰ったか弟よーつー。おねーちゃんは前晴れ姿を見れて・  
・」

「しーひやん邪魔つー。兄ひやんおかえりとして卒業おめでといつー。」

「ちーひやんひどいっー?..」

「むむ、ちーひやん。ただいま。。座りっぱとか腰痛え。。。」

「おーひやああーーつー。」

カオスになつたお姉さんのは。。。

腰を抱えて「おつる」と呻く黒い髪の小柄な少年。

みんなとお別れの少年のお姉さん。

そんなお姉さんの頭を手で押えてるのは、少年の従妹。

そして奥のドアからととと駆け寄ってくるのも、少年の従妹。

このお話を、少年、『立花志乃』と、その家族のお話である。

## 001 姉弟の卒業

Side志乃

春です。ああ、はじめまして。志乃ですよ。

今日無事に卒業式を終えて家に帰つてしまひました。

部屋着に着替えてソファに座つてゐるなつ。

そして一言言おつか。『腰が痛い』と。

いや、決して運動不足とかではない。

教室を涙と共に出る時、旧友に腰パンを食らいまくったのだ。

腰パンわかる？ そのままの意味。腰にパンチ。

ちなみに「腹パン」とか「肩パン」とか、顔面を狙う「ガチパン」もある。

この級友達は高校でも会えるのに懃々土産に何十発か放つてきたのだ。

つべーわ。まじっべーわ・・・

そんな事を思いつつ、4人が余裕で並べて座れるソファへうつ伏せになる。

「腰痛いの？ 志乃ちゃん・・・爺臭いねー・・・

「なー・・・」

「ええい黙れ。級友の置き土産だから大人しく食らつたんだ」

続けてそこにある姉と従妹へ口撃をしようとしたその時。

「あ、みーちゃんダメっ！…」

「？」

「おにーちやーんっ！」

従妹の鋭い声にふと横を見ると、走ってくるひめちゃんの影が…

いつもは笑って受け止めている小さい影に俺は恐怖した。

その小さいが全体重の乗った小さい影のジャンプ攻撃。

「どーん」

「ほぐ・・・ぬおわあああ・・・」

「みーちゃん・・・ダメでしょ！が・・・」

紹介しよう。

この小さい影は今年4歳になる幼女、みーちゃん。

ダメでしょ？ がとみーちやんを宥めるのほどの姉、ちーちやん。

この一人は俺の従妹で、色々と訳あつて一緒に住まわせて貰つてる。

俺は体勢を仰向けにして、改めてお腹の上にみーちゃんを乗つけた。

「エリート少年」

「九一八」

「本当に志乃ちゃんは幼女にモテモテだね・・・」

——みーちゃんが可愛いのが悪いんだよ。うんうん

ロコノハジヤない。従妹シ、イトコシ? まあそんな感じだ。

ああ、今のは俺の姉、通称しーちゃんだ。

三つ年が離れていて、俺と一緒に高校を卒業。

頭も容姿も優れてるので、大学に入つて活躍するだろう。

(今の俺は当時そんな事を思ってました。)  
（はい）

「どうあえず遅めだけど」飯にしようか

「今日誰作る?」

「おねーちゃんが作りつか……」

「しーおねーちゃんお願い。」

「しーおねーちゃんおねがいーっ」

「じゅあ頼むわ」

意氣揚々とキッチンへ行く姉の背中を見つめ、

俺は床にポンと置いてあった学校のパンフレットを手に取った。

その学校の名前は、私立黎明学園高等学校。

「学校ね……」

ちゅうとだけ不安だけど、それ以上に楽しみだ。

この春休みは、非常にわくわくした毎日になるだろ。

そんな事を思つて、俺は活字のパンフを見つめた。

「「なんだつー..」」

「まだつんじておひるのがつ」

「んー? なー?..?」

「おひるあひらがつーおひるのがつ」

みーちゃん4歳、ちーちゃん13歳、姉さん18歳、俺、15歳。  
なんだかヘンテコな毎日を、これから綴つていこうと思う。

001 姉弟の卒業（後書き）

次回から、一話で一人分×4の紹介をします。

## 002 立花詩織とは。ｂｙ志乃

どうも。春休みに入った立花志乃です。

「志乃ちゃん！ 焦げたーっ！」

「何やつてんだよバカ姉がーっ！」

「ミスつちつた。テヘペロー＝」

「・・・はあ・・・」

この日常を始めるにあたって、まずは俺の姉から紹介する。

彼女の名前は・・・。

「立花詩織っ！ 永遠の18歳！」

「どうやら年はこれ以上とらないらしい。」

性格は大らかで優しくて豪快な感じ。  
そんな姉の特徴は。

prrrrrrr!

「あ、もしもし沙紀ー？」　ジーしたのよこんな時間に・・・」

「立花です。・・・加藤先生、どのよひなご用件で？」

prrrrrrrr!

「リツ、ビーし・・・は？」 壊した・・・？（ズゴゴゴ）

とまあキャラクターの使い分けが多かつたり。

「ふつふつふ・・・おねーちゃんに挑もうなど100万年早いのだ

「……………」

そして合氣道、柔術などの中でも実践主義の道場に通つていて、

我が家では最高の戦闘力を誇る……近接戦闘のスペシャリストだ。

「ふんぬつ！」

我が家へのソフトを軽々と持ち上げるほどの力持ち。

家具の模様替えの時とか本当に助かってます。

「超能力はないよー」

そしてPSHには覚醒していない。あとは・・・。

「お姉ちゃんまたいい点取つたわ・・・」

すつごく頭がいい。大学でも問題なく過ごしててくれるだろう。うん。

ここいらで容姿の確認をしておこう。姉さんははつきり言って美人だ。

黒田、黒髪をストレートにしていて、ぱっちり開いた口、  
ふるんとした唇に形のいい鼻に常に笑ってる印象のある口。

・・・まあ、スタイルもいいのではないのでしょうか。

「ダメだよおねーちゃんに欲情して（ゝゞ）

「しねーから」

纏めると容姿端麗、成績優秀、友人関係良好、戦闘能力最高。

一見すると「万能な姉貴持ちやがつてそこ変われゲスがつーーー」

などと思われそつだが欠点も上げておこう。

1、「おぬやーん・・・リモコン取つて～」

めっちゃグータラ。いつも頑張つてるからいいんだけどや。

2、「良い風田じゅつた・・・」

基本無防備。弟の精神衛生上よりしくない。気も使わないといけないし。

3、「ダメーー！ おねーちゃんが勝てるまでやるーーー！」  
悪い意味でも、負けず嫌い・・・そり、「どうでもここと」の  
だ。

一人称は私、おねーちゃん。

呼ばれ方は・・・色々か。

「・・・もしかしてお皿の材料足りないんじゃないの・・・？」

俺は冷蔵庫を開けて中身を確認しながら言った。

焦がしたのは多分・・・野菜炒め・・・かな・・・？

もう一度作ろうにもなんだか数が少ないような。

・・・買出しに行ってなかつた影響か。はふう・・・。

「一人分無いね」

んー。と、いつもの唇を指でなぞりながら囁つマイ姉。

「・・・まあ、姉さん食べてよ。俺は抜きでここから

「・・・」「あん」

流石に悪いと思つたのか、姉さんはそう言いながら撫でる。

この人は悪気があつてやつてるんじゃないし、わざとじゃない。

そもそも姉さんとは・・・小さこ時からずっと仲良じだ。

・・・まあ、こんな話はおいおい話すことになるだろつ。

他にはこの人、能力者とのケンカでも問題なく立ち向かう人だ。  
正直この人が心配なんだけど・・・。

「・・・俺の電波攻撃に適つわき」「すみーんつー」「

能力者の同級生の暴走を止める時・・・姉が何をしたかというと。

近くにあつた学校のイスを能力者に向かつて蹴り飛ばし、

たまらず床に倒れたところに近づいてローキックといつ悪魔の所業。

とまあ肉弾戦では心配する事など無い。

ただ余計な恨みを買つてる節があるのでよねこの人。

「へーきーへーきー」

といつあえず『氣にしない』だと片手を胸の前で振る。

まあ少しなら我慢できるし、夕飯に沢山食べればいいから・・・。

「氣合で補つて!」

・・・。

「・・・貴女ーの首に狙ーいをつーけてー」

「ハニツキハスモアヤシキカガタ、ナリ、」

こんな姉でも、俺の大切な人である。

002 立花詩織とは。 b y志乃（後書き）

志乃の名前にについては志乃の紹介時にお話します。

〇〇三 結野美香とせ。 ｂｙ 藤織（前書き）

昨日、文学部門日刊ランキンギー位で超びひつたよー。www

不定期だけど更新頑張ります。

「ここにあは。首が少々痛い、おねーちゃんです。

「・・・こいつら・・・」

「しーちゃん大丈夫?」

「あはは。大丈夫よみーちゃん」

「おにーちゃんはね、怒ると怖いんだよ?」

「そーね・・・だから、ここ子にするのよ?」

「うそー!」

「ハーン、この子は本当に優しいなあ・・・。

あ、そうだ。この子について紹介しないとなつ!

「 ゆいの、みかですっ！ 4歳になりましたっ！」

この子の名前は結野美香。遅生まれの4歳だ。

つい昨日、3月10日に誕生日を迎えた、私たちの従妹である。

性格は好奇心旺盛で天真爛漫。年相応の女の子、だろうか。

そしてこの子の特徴を挙げようと思つ。

「 しーちゃん、これなんてーのー？」

本を持つて私の元へやつてきたりとか。

「 おねーちゃん、かくれんぼーっ！」

自分の姉の下へと走り寄つたりとか。

「おひーちゃん、くるふみーっ！」

「……な、なにやつての……？　てか英語……？」

洗濯物にぐるぐる巻きになつて、弟に助けを求めたり。

とまあこんな感じで日々を過ぐしてゐる天真爛漫な幼女だ。

私が志乃ちゃんが迎えに行くまで、園に預かつてもうつてゐるのだけ  
ど。

「あ、こんひむけ三島先生。立花です」

「あ、立花さん、今日は弟さんじや？」

「弟は急用で来れなくなつてしまつたので、私が……」

「あらわお・・・あ、みかわちゃんは今日も・・・ほれほれ」

三島先生といつ先生の言葉と指の先を追つて、

男の子3人に囲まれてるみーちゃんが。

「・・・ぬおお・・・？」

その3人、いつもは見ない子達。今日は早めに来たから、私たちが迎えに来るいつもの時間にはもう帰ってしまってゐる子達だらう。

そして私がこの女らしからぬ声を上げたのには理由がある。

「おかげでこれやれど、一。」

—  
? ? ?

絶賛逆ハーレム形成中。未来が心配だ。

「物語」――「物語」――「物語」――「物語」

1 時間経過

「が、がお————・・・」

「 もやー————つ 」

余裕で同じ遊びを1時間以上続けられ、かつテンションを維持できる事。

恐ろしき子供の体力・・・私もそんな有り余るくらいの気合が欲しいなあ。

そんな元気娘、みーちゃんの特技は。

Q みーちゃん、特技は?

「ん~・・・ん~・・・

「・・・」

「おこーちゃんの」飯を、おこしへべべりませんかー。」

「 「 「 せつかま 」 」

「 といひで特技ってなあに? 」

ちなみに我が家のかわい萌え担当です。

なので志乃ちゃんはみーちゃんに甘々なのである。

・・・ロココノジヤなべトイトロンとか主張してこぬナビも。

ああえつと、この子の外見を語りておいた。

茶色の髪の毛を伸ばして三つ編みにしている。

ちゅうと垂れた耳にふにふにのほっぺ。

そして4歳らしく小さく身長に小さな掌。

そしてちゅうぴり赤い鼻をしてる幼女である。

「ちゅーの一いつはもつてないよつー」

もたれんやうには覚醒していない。

もつとも、この子が昏睡したら志乃ちゃんが泣くだろう。

一人称はみーちゃん。

呼ばれ方もみーちゃんかな？

「ふむ・・・」

またソファに寝そべった弟のお腹の上に再び乗り始め、

そのまま抱っこされて抱き枕されたみーちゃんを見つめた。

「おにこちゃん、おにこちゃんひー・・・」

「・・・ZZZ」

「寝ねやだめなのひ みーちゃんと遊ぶのひ」

どいが嬉しそうなのはやはり弟に抱き枕こられてるからだらうか。

弟のマイトロンも大概にしろー・・・なのだけども、

みーちゃんが実の姉以上に弟になつこいついるのも事実である。

「んー・・・」

「ひーちゃん?」

「こやね、進路・・・」れからどんなお仕事しようか迷んでゐるの

「おひるべへ、お嫁さんないなごの~。」

「あはは・・・はは・・・お嫁さんねー・・・」

「・・・・?」

「あひ~。みーちゃんは・・ええと、お花屋さんだつた?

あー、ケーキ屋さんとか書つてた「おがいひーつ」・・・?」

「おこりやんのねよねたさだよ!」

「・・・あはは、わつかー。可愛になあみーちゃんは」

「おーいやと「おじよの」になるのー?」

志乃、南無。

「おこちゃん！ おこちゃん！ あそーんーでー！」

「・・・ணண」

高校の卒業式はクラス全員が名前を呼ばれてその場で起立。

全員揃つたら着席 次のクラス 全部クラス終了 代表が証書受け取り。

こんな感じが高校の卒業式だったのだが、義務教育は違うのだ。

小中学校は全員が取りに壇上へ上がる。少なくとも志乃の学校はそうだ。

しかも志乃の代は7クラス・・・少なく見積もつても $30 \times 7 = 210$ 人。

相等疲れているだろう。現に私もめっちゃ疲れた記憶がある。

「おいまーちゃん、じのちゃんは・・・」

疲れてるから。とぬいとしたと、コンビングのドアが開き・・・。

「「」飯は？・・・つておに兄ちゃん、みーちゃんが嫌がつてゐるぞ」

ひょいっ・・・げしい！

「つぶあつー？」

「やしてソファ占領すんなよ邪魔つー。」

「・・・やれやれ」

私は急にリビングへ入つてきて瞬く間にみーちゃんを救出し、弟をソファから落としたもう一人の従妹を見て肩をすくめた。

003 結野美香とま。b y 藤織（後輩）

7クラスは本当に私のクラスの数でした。

多いよねー・・・卒業式にちごく時間が掛かりました。

ちなみに卒業式の形は姉にインタビューをしていました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9416z/>

---

例えばこんな毎日を

2011年12月31日17時49分発行